大菩薩峠

（二）

龍神の巻

中里介山

時代小説文庫

時代小説文庫　2

大菩薩峠（二）　龍神の巻　全二十冊

昭和五十六年七月二十日　初版発行
昭和五十六年九月二十日　再版発行

著　者　中里介山
発行者　原　秀行
発行所　株式会社富士見書房
東京都千代田区富士見一―十二―十四
電話東京二六一―五三七五（代表）
〒一〇二　振替東京⑦八六〇四四
印刷所　旭印刷　製本所　本間製本
装幀者　熊谷博人

落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-600102-7440(0)

大菩薩峠 (二)

龍神の巻

中里介山

時代小説文庫 2

富士見書房

目次

龍神の巻　七

間の山の巻　八三

東海道の巻　二三

白根山の巻　三一

『大菩薩峠』　桑原武夫　四〇〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大菩薩峠

(二)

龍神の巻

龍神の巻

一

天誅組が、いよいよ勃発したのは、その年の八月のことでありました。十七日には大和五条の代官鈴木源内を斬って血祭りにし、その二十八日は、いよいよ総勢五百余人で同国高取の城を攻めた日、その翌日十津川へ退いて、都合二千余人で立て籠ったときの勢いは大いに振ったもので、この分ならば都へ攻め上り、君を助けて幕府を倒すこと近きにありと勇み立ち、よく戦いもしたけれど、紀州、藤堂、彦根、郡山、四藩の大兵を引き受けてみて、力が足りないのは是非もないことでした。

侍従中山忠光は浪花へ落ち、松本奎堂、藤本鉄石、吉村寅太郎らの勇士は、或は戦死し、或は自殺して、義烈の名をのみ留めた――十津川乱の一挙は近世勤王史の花というべく、詳しく書けば、ここにまた一つの物語を見出されようけれども、それはここに必要を認めず。いよいよ、これらの一味の者が散々になって、ある者は伊勢路へ、ある者は紀州領へ、ある者は大阪方面を指して、さまざまに姿を換えて落ちた後のことであります。

鷲家口の戦いから落ち延びた十一人の浪士が、木にも草にも心を置いて風屋村というところへさしかかって、

「ああ、水が飲みたい」

「水が欲しい」

村とはいうものの、ここは十津川郷の真ん中で名にし負う山また山の間です。十津川の沿岸を伝うて行けば何のことはないのですけれども、四藩の討手が、残党一人も洩らすまじと、夜となく日となく草の根を分けている際ですから、それは出来ませんでした。

大日ケ岳へ連なる山々を踏みわけて、木の繁みを潜り潜り歩いて行くのだから、水にも遠くなる、水、水というけれども、木苺一株を見つけ出してさえ、十一人の眼の色が変るくらいですからその腹のこたえは思いやらるるのです。

「川岸まで戻ってみようか」

眼を見合せて惨澹たる面の色。

「それはよせ、最前鉄砲の音が聞えた、拙者の考えでは、これをずっと向うへ横に切って、紀州の日高郡を目ざすが無事だと思う」

「道程は……」

「風屋——小森——平松——三本磯と行って紀州日高郡の龍神へおよそ十三里」

「その間の兵粮は……」

「さあ、それが……」

一同は口をつぐんで足が動かない。
「各々方、あれを見られよ、煙が棚引いている」
沈んだ声で、後ろから言い出したのは、あのとき以来、何をしていたかともかく、ここまで傷一つ受けずに来た机龍之助でした。
翠微の間に一抹の煙がある――煙の下にはきっと火がある、火の近いところには人があるべきものに定っています。
「なるほど、煙が立つ、拙者が容子を見て来よう」
村本伊兵衛というのが出かける。
「よし、我輩も行こう」
荷田重吉がいう、村本と荷田は連れ立って、その煙の方へ行ってみます。あとの九人は、木の根と岩角とに腰をかけて、その斥候を待っています。
「諸君仕合せよし」
村本と荷田は欣々として帰って来て、
「山小屋がある、その中には猟師と見えるのが、炉に火を焚いて、何やら獣の肉を煮ている」
「ナニ獣の肉を」
肉と聞いてうまそうな唾が口の中からほとばしるようであった。
「敵の間者ではないか」
「いや、そうではないらしい、たしかに生えぬきの猟師と見受けた」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「推しかけろ」
「行ってみろ」
村本と荷田は案内する。九人はそれに伴いて行って見ると、山腹のやや平らかなところをほどよくこなして、そこにかなり大きな掘立小屋があります。
「頼む……」
「うあ……」
中で妙な調子の返事がある、面を出したのは正に猟師に違いない。ずっと前に、はじめて三輪の藍玉屋の不良息子の金蔵に鉄砲を教えた惣太でありました。
惣太は面を出して見ると、都合十一人、筒袖に野袴をつけたのや、籠手脛当に小袴や、旅人風に糸楯を負ったのや、百姓の蓑笠をつけたのや、手創を布で捲いたのや、いずれも劇しい戦いと餓とにやつれた物凄い一団の人でしたから、
「やあ、お前様方は何だ」
「驚くことはない、これから紀州の方へ通る者だが道に迷うた、しばらく休息させてもらいたい」
「へえ、よろしゅうございます、こんな狭苦しいところでございますが」
惣太は杉板を三枚合せて綴った戸をあけて、中へ一行を招じ入れたが、気味の悪いことはおびただしい。
「お前様方は、あの天誅組のお方様でございますか」

「何でもよろしい、そこを締めろ」
「へいへい」
「さあ、猟師、何か食うものはないか」
「別に何もございません、何しろ、このとおりの山小屋でございますからな」
「それは何だ」
「これは猪でございます」
「猪！　それは至極よろしい、その猪を売ってくれんか」
「お売り申してもよろしゅうございます」
「よしよし、それでは買おう、鍋もそのままにして、味噌か醤油もあるであろうな」
「エエ、ただいま出してあげまする」
思わぬところで意外の御馳走。一行は炉の周囲をかこんで小舎一ぱいに拡がって、
「猪の肉とは有難い――猟師、もっと大きな鍋はないか」
「へえ、こちらにございます」
惣太は、いま炉にかけてあったのより、やや大きい三升焚きぐらいの鍋を押入れの中から引っぱり出して、それから上り口へ寝かしておいた猪の股のあたりの肉を切りにかかった。
「大きな奴だな、この辺には、こんなのが沢山いるか」
「へえ、大分いるにゃいますがね、近頃は戦争で鉄砲の音が、やかましいものですから、皆んな紀州筋へ逃げ込んで、やっと五日もかかって、此奴を一つ仕止めたのでございます」

「そうか、何しても有難い、代はいくらでも取らせるぞ、早く料理をしてくれ」
「では、こうして丸切りにして、鍋の中へぶち込んで、ぐつぐつ煮立てて進ぜましょう」
「それがよかろう、よかろう」
惣太はよく働いて猪の肉を煮てやります。気味が悪くてたまらないけれども、愚図愚図言えば、どんな目に逢うか知れたものではないから、神妙に言われるとおりに世話していると、浪士らは寝たり起きたりして肉の煮えるのを待ち構えています。
「おいおい、猟師、黙っていてはいかんぞ、ここに有難いものがある」
磯崎という浪士が、寝ころんでいた自分の枕許で見つけ出したのが貧乏徳利であります。
「やあ、それを見つけられてはたまりませんな」
「何だ、酒か」
それだけは隠しておきたかった。惣太が今猪の肉を煮ていたのは、実は取って置きのその濁酒を一ぱいやりたかったからであります。肉のほうは、いくらでも御用に立てるが、酒のほうはかけがえがないからそれを見つけ出された惣太は苦い面をしました。
「うむ、猟師、人が悪いぞ、これを隠して一人でこっそり飲もうなどは不届きだ……一升は確と認めた、茶碗を出せ、さあ各々」
肉の煮える間、一升の濁酒は十一人の口を潤おしている。
それを傍で見ている惣太の顔色はない——惣太が、こんな危ない時世に、山奥へわけ入って猛獣を追い廻しているのも、この一升が生命なのであります。

それをみすみす、人に飲まれて自分は指を咬えながら、料理方を承わっている辛さ口惜しさというものは容易なものではないのでした。

「猟師、猟師」

肉の煮えた時分に惣太の姿が見えなくなっていました。

「猟師、どこへ行った」

呼んでみたけれども返事がない、一同は少しばかり怪しんだけれども、さして気にも留めず、それから寄って集って猪の肉を突く。

「猟師はどこへ行った」

「逃げたかな」

「逃げたようじゃ、逃げて訴人でもしおると大事じゃ」

「いいや訴人したとて恐るるに足らん、藤堂の番所までは六里もあるだろう、悠々腹をこしらえて出立する暇は充分」

「よし十人二十人の討手が向うたからとて、かくの如く兵糧さえ充分なら何の怖るることはない」

「とかく、戦というものは腹が減ってはいかん」

「古いけれども、それが動かざる道理」

「それにしても、中山侍従殿には首尾よく、目的のところへお落ちなされたかな」

「心もとないことじゃ」

「十津川を脱けて、あの釈迦が岳の裏手から間道を通り、吉野川の上流にあたる和田村というに宿ったのが十九日の夜であった」

「そのとおり」

「中山殿はじめ、松本奎堂、藤本鉄石、吉村寅太郎の領袖は、あれから宿駕籠で鷲家村まで行った、それから伊勢路へ走ると先触れを出しておいて、不意に浪花へ行く策略であったがな」

「彦根の間者が早くも、それと嗅ぎつけて、大軍でおっ取り囲んだ——吉村殿と、安積五郎殿が一手を指揮して後方の敵に向うている間に、藤本、松本の両総裁が前面の敵を斬り開いて、中山卿を守護してあの場を落ち伸びたが、さて危ないことであった」

「そこを落ち伸びると、たちまち紀州勢が現われて藤本殿はあわれ斬死じゃ、悼ましいことではあるが、その働きぶりは、さながら鬼神のすがたであった」

「その日の夕暮れ、またも行く手に大敵が現われて、松本総裁は牧岡氏と池氏とに後を托して、中山卿を守りて長州へ落ちよと申し含めて、自身は大敵の中で美事な切死」

「さてさて、天命是非もなし、我々こうして永らえているも、一に中山卿の安否が知りたいため」

「それも、どうやら望みが絶えたわい——」

この中では最も重い、組の監察をしていた酒井賢二郎が言い出でた一語は沈痛に響きました。それは絶望の叫びであって同時に覚悟の決定を促すように聞えたから、一同はしばらく無言で酒井の面を見ていると、酒井は、

「それに比べては僭越であるが、建武の昔、楠正成卿が刀折れ矢尽きて後、湊川のほとりなる水車小舎に一族郎党と膝を交えて、七生までと忠義を誓われたその有様がどうやら、この場の風情と似ているのではないか」

「いかにも……」

「もはや、いずこへ落ちたとて、袋の鼠、飢え疲れて名もなき者の手にかかり、縄目の恥などに遇うて、先輩や同志の名を汚すは、この上もなき不本意、ここらで落着いて、武士らしい最期を遂げようではないか」

「もっとも……」

一同は更に異存がない、異存らしい面色もない。死すべきところに死なければ、死せざるに勝る恥があるということの分別はいずれも人後に落ちないものであったから、彼らは死を争おうともそれに異議を唱うるものが一人もあるべきはずがない。一座が無言にして沈黙の重きに圧されたのは潔よき同意の表白であったから、言い出した酒井賢二郎も満足して、

「御同意でかたじけない、ただし、これは強いては申さぬこと、なおまた万死を賭して中山殿の御跡をお慕い申してみたい者は、そのようになさるがよい、国に残る妻子眷族のことが気にかかるものあらば、それもまたお心任せ」

酒井賢二郎は一同を見渡して念を押すと、静まり返った中から、

「いかにも酒井氏の申さるること、道理至極、死すべき時に死せざれば死するに勝る恥がある。今はとても中山殿のお跡を慕うこともなり難し、いわんやまた今更に妻子眷族に未練を残す者も

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com